
曼珠沙華

歯車るら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曼珠沙華

【Nコード】

N8691C

【作者名】

齒車るらら

【あらすじ】

一面に咲いた赤い彼岸花の中で、僕と女は向かいあって座っていた。

夏には見渡す限り緑の原っぱは、秋にもなると一面真っ赤に染まる。

遠く高い空は目が眩むほどに真っ青で、天と地のコントラストが意識を遠ざける。

僕はその場にぼったり倒れ、いつしか眠ってしまっていた。

肌寒いと思い、身を起こした。

まだ高かったはずの太陽も、早沈もうとしている。

ふと、後ろに視線を動かす。

いつの間にか女が一人、僕から少し、ほんの少し離れた場所に座っていた。

真っ黒な髪を昔風に結び上げ、いくつもの簪を差していた。

真っ黒な着物には、真っ赤な彼岸花がいくつも描かれていた。

唇には真っ赤な紅を差し、しかしその瞳は白い琥珀の色をしていた。

きちんと正座をし、両手を腿の辺りに置いた女は、僕と視線が合っても身じろぎ一つしなかった。

「こんにちは」

どうして良いか分からず、目が合ったのだから、とりあえず挨拶を試してみた。

だが女は答えず、じっと僕の間を見ているだけだった。

このまま帰ろうかとも思ったが、女が気になり、彼女の正面に向かいあって僕も正座した。

空も大地も真っ赤に染まり、暗闇が押し迫る。

僕と彼女の間には、真っ赤な彼岸花がこれでもかと咲き誇り、お互いをまったく近づけさせない。

それでも、僕はずっと女の瞳を見ていた。

乳白色とでも言うのか、琥珀色とでも言うのか、とにかく彼女の

瞳の色は、この場にあつてはひどく不自然だった。

風が冷たい。

向こうの山の木々を揺らめかせる。

ひと際強い風が、原っぱを襲う。

女は、一筋の涙を流す。

「染まりたい」

ただ一言そう言い、彼女はまた黙ってしまった。

簪の飾りが、しゃらしゃらと涼やかな音を奏でる。

僕は、口内に溜まった唾を飲み込んだ。

呼吸をするのも忘れてしまいそうになる。

赤い曼珠沙華が、さわさわと揺れる。

あたかもそれは、彼女を嘲笑しているかのよう。

僕は何かを言おうとして、寒さに身体を震わせた。

気づけば僕は、たった一人で赤い曼珠沙華の中に眠っていた。

身体を起こし、軽く首を振る。

体が冷え切っている。

空はもう、山際に赤みを残して、暗く染まっていた。

僕は霞んだ目をこすり、振り返る。

そこに女はいなく、白い琥珀色をした彼岸花が一輪咲いていた。

(後書き)

白い彼岸花は、赤いそれよりも儚くて好き。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691c/>

曼珠沙華

2010年12月3日14時29分発行